

# 吉田神道と北斗信仰

菅原 信海

## はじめに

吉田神道つまり唯一神道の創唱者は、いうまでもなく室町期の吉田兼俱（二四三五～一五一一）である。この兼俱の北斗信仰については、特筆すべきものがある。そして同時に、北斗信仰を通して、いわゆる道教についての關心の深さを推測することができるのである。道教といっても、その頃道教という宗教そのものをどの程度意識していたかについては疑問もあるが、道教的信仰や、道藏中の經典を引用するなど、一應今日いわれているところの道教の影響と見做しておく。

北斗信仰の證例は、既に指摘されていることであるが、(1) 兼俱の撰であって、しかも吉田神道の教理書の『名法要集』に、『北斗經』註の文が二ヶ所にわたって引用されているこ

吉田神道と北斗信仰（菅原）

と。そしてその引用の一つは、傳洞眞の『太上玄靈北斗本命延生經註』からのものであり、他の一つは、元の徐道齡の『太上玄靈北斗本命延生眞經註』（以下、『北斗眞經註』と略稱）からのものである。(2) また『名法要集』の中に「三部本書」即ち『先代舊事本紀』・『古事記』・『日本書紀』と並んで出てくる「三部神經」即ち『天神變神妙經』・『地元神通神妙經』・『人元神力神妙經』は、「天兒屋根命神宣也。後世、北斗七元星宿眞君、<sup>(1)</sup>降而寫漢字爲經。是云三部神妙經。」といわれているように、天兒屋根命の神宣であって、後世北斗七星の神格化された北斗七元星宿眞君が漢字に寫したものであるといっていること。しかし、この「三部神經」は架空の經であって、現實には存在しない。(3) 景徐周麟の『翰林胡蘆集』第九に収める「三俱元辰君悟道記」に、

文明十四歲在壬寅、閏七月廿四日夜寅刻、北斗一星、降于國朝神道頂上卜部氏吉田二位兼俱公私第庭。光芒一二丈、離地者二三尺。公接之以吾宗師家棒喝。少焉有言、如聲之應于甕中。曰、先是觸尊公棒喝者數矣。今夜始是悟道。這棒喝、莫是從三和向所得來耶。請併取和尚諱與尊公諱、更名曰三俱元辰君、拜爲帝師上。

とみえており、<sup>(2)</sup>北斗七星の中の一星である貪狼星が、文明十四年閏七月二十四日夜の寅刻に、兼俱の私邸の庭に落下し、兼俱はこれに師の横川景三から譲り受けていた棒喝をくらわせ大悟せしめたという話である。北斗信仰の證左として、以上の三點を指摘することができる。兼俱が、吉田神道を創始し大成させるには、北斗信仰を通して、道教がただならぬ役割を果たしていることを、明らかに看取できるのである。

一

ところで、兼俱以前の神道關係で、道教色の強いものは、いろいろあるが、古くは祝詞の中に道教色の濃いものがある。それは七世紀中頃のものといわれる「東文忌寸部獻横刀時咒」で、この祝詞の中に東王父や西王母の名がみえてい

る。即ち、

謹請、皇天上帝、三極大君、日月星辰、八方諸神、司命司籍、左東王父、右西王母、五方五帝、四時四氣、捧以銀人、請除禍災。捧以金刀、請延帝祚。咒曰、東至扶桑、西至虞淵、南至炎光、北至弱水、千城百國、精治萬歲。萬歲萬歲。

とあるのが、それである。<sup>(3)</sup>時代は降つて、中世の神道説と密教・陰陽道との關聯については、既にその研究もなされているが、道教との關聯についての研究は殘念ながらそう多くない。しかし、最近、吉田神道における道教の影響についての研究が少しではあるが、目につくようになった。出村勝明（龍日）氏の一連の研究がそれであるが、これは西田長男博士による吉田神道と道教との關係を論究した高説が、その先鞭となつてゐる。<sup>(4)</sup>

兼俱の神道説は、兩部神道・伊勢神道の教説を取り入れ、密教や道教をも加えて、獨自の神道説を打ち立てた。なかでも、密教の影響は著しいものがあり、そのことは既に平田篤胤の『俗神道大意』に指摘されている。つまり同書卷三に、サテ吉田家の神道行事ハ、モト眞言ヲマナシテ始タルコトユエ、其壇モ四角ナルベキニ八角ニ作テ祕事トイタシ、神

道ハ八ノ數ヲ用フルナドイヒ、神道護摩、宗源行事、十八神道、コノ三ツヲ三科ト立テ、此ヲ兼學シタルヲ、三壇行事トモ云フ。此外神道灌頂、神道加持、火燒行事ナドイヒ、猶クサグサ有テ祕事トシ、此ヲ切紙傳受ト云ヒテ、ヒソカニ傳ヘル、此三壇行事ノウチ、護摩灌頂ハ、モトヨリ眞言ノ行法、マタ宗源行事ト云コトハ、密家ノ兩界ノ本次第、ト云行事ヲ盜ダルモノ、又十八神道ト云モ、眞言ノ十八道トイフ行事ヲヌスミ、云々。

（5）吉田神道で、三壇行事、つまり火燒行事（神道護摩）・宗源行事・十八神道の三つを立てているが、神道護摩や十八神道は密教からの模倣であることは、いうまでもない。その他、切紙傳授を行ったり、神道灌頂・神道加持をしたりするのも、やはりそうである。模倣であっても、吉田神道の獨自な受容と變容の仕方がみえ、例えば護摩壇が神道では八角であつて、八の數を好んで用いる、といっている。

また、兼俱の『名法要集』では、顯密二教の區分の仕方を取り入れて、神道を顯露教と隱幽教とに分け、隱幽教を更に分けて萬宗壇と諸源壇に分けている。萬宗壇と諸源壇とはいわゆる金剛界と胎藏界に比定することができる。同書には、また四重四位の密位授與の段階に同じく密教の四重祕釋（淺

略、深祕、祕中之深祕、祕祕中之深祕）を模倣して、初重相傳分、二重傳受分、三重面接分、四重口決分の四重を立てている。

## 二

さて上に述べたように、兼俱は『北斗經』を引用したり、また『北斗經』を書寫しており、北斗星についてかなり深い關心を示しているといえる。そこで、兼俱の北斗信仰は、如何なる特徴があるかをみてみると、まず第一に、『北斗經』が北斗七星信仰を主としているのに對して、兼俱の北斗信仰は北斗七星信仰であることである。これは、現在『正統道藏』に收められている『北斗經』つまり『太上玄靈北斗本命延生眞經』と、天理圖書館吉田文庫藏の『北斗經』とを比較することによって知ることができる。吉田文庫藏の『北斗經』は、『吉田文庫神道書目錄』によつてみると、四本存しており、その内の二本は兼俱の孫兼右修補本及びそれを底本とした集註本であり、他の二本は『北斗經』の本文のみの抜粋である。兼右修補本の元になったものは、西田博士によれば、兼俱自寫本に近いものであらう、としている。<sup>(6)</sup>自寫本に近いものであらうとの極めて慎重な推論であるが、後にも觸れる

ように、『北斗經』はかなりその構成を變えられて書寫されており、それができるのは、兼俱以外には考えられない。

第二に、兼俱はかくの如くに『北斗經』を書寫しているが、その底本となつた道藏本の『北斗經』は、後述するように、實は『北斗眞經註』であつた。しかも、それは全く同じ書寫本とはいえないのである。それは兼俱の神道理論に基づいて、編集し直している。實はこのような傾向は見逃すことのできないことで、兼俱は道教經典を書寫する場合に、兼俱自身が恣意的に作り直し換骨奪胎し、吉田神道の教義書向に變えてしまつてゐるということである。即ち、元の『北斗眞經註』の構成をかなり恣意的に書き變えてしまつてゐる。つまり吉田文庫本『北斗經』は、兼俱の手が加わつた兼俱独自の吉田神道の教理書となつてしまつたといえる。その書寫本は、現在天理圖書館吉田文庫藏『太上說北斗元靈本命延生妙經』の名で残つてゐるのである。ところで、この吉田文庫本『北斗經』の底本は何であるかという点、同書の卷首に、

太上說北斗元靈本命延生妙經

玄陽子徐道齡集 註

乾陽子徐道玄同校正

とあり、それはいまの『正統道藏』に収める元の徐道齡註の

『太上玄靈北斗本命延生眞經註』であることがわかる。ただ、『北斗眞經註』は五卷本であるが、吉田文庫本の『北斗經』は徐註本の卷五を闕いており、一卷本として合冊されている。卷五を闕いてゐることの理由については、後に問題として取り上げたい。『北斗經』の註釋書には、この他に傳洞眞註と玄元眞人註の二本が道藏には存するが、この兩書でないことは、吉田文庫本と比較してみてもわかることである。ただこの内の傳洞眞註だけは、兼俱がみていたようで、それは『名法要集』にその引用文があることによって知ることができ

る。第三に、吉田神道においては、『北斗眞經註』の卷五に収める「玄靈符」を組み換えて『神祇道靈符印』として、一卷本で別行され利用されている。また『北斗經』も經典として、讀誦に供されていたようで、また特に吉田文庫藏の『唯一神道北斗七元神法次第』は北斗神法修法のためのものとして、恐らく兼俱によって撰せられたものであらう、と思われる。

### 三

上記の各問題點について、一項毎に検討して行きたいと思

う。まず第一に、『北斗經』の北斗九星信仰と吉田兼俱の北斗七星信仰についてであるが、道藏本『北斗經』と吉田文庫本『北斗經』とを比較してみると、次のようになる。

道藏本『太上玄靈北斗本

命延生眞經』

北斗第一陽明貪狼太星君

靈本命延生妙經』

北斗第二陰精巨門元星君

北斗第一陽明貪狼太星君

北斗第三真人祿存眞星君

北斗第二陰精巨門元星君

北斗第四玄冥文曲紐星君

北斗第三真人祿存眞星君

北斗第五丹元廉貞綱星君

北斗第四玄冥文曲紐星君

北斗第六北極武曲紀星君

北斗第五丹元廉貞綱星君

北斗第七天衝破軍關星君

北斗第六北極武曲紀星君

北斗第八洞明外輔星君

北斗第七天衝破軍關星君

北斗第九隱光內弼星君

中天天聖上台輔元通妙玄道

上台虛精開德星君

天尊養生主者

中台六淳司空星君

中天天聖中台仁化昭德延福

吉田神道と北斗信仰（菅原）

下台曲生司祿星君

北斗左輔洞明星君

北斗右弼隱元星君

道藏本『北斗經』をみると、北斗第一陽明貪狼太星君から

北斗第七天衝破軍關星君までを並べ、その次に北斗第八洞明

外輔星君・北斗第九隱光內弼星君の二星の輔弼星が並べられて、北斗九星の構成になっている。これに對して、吉田文庫

本『北斗經』をみると、北斗第一陽明貪狼太星君から北斗第七天衝破軍關星君までを並べ、その後三台星がきて、

更に天罡星がきて、かくしてその後第八・第九の番號なしに北斗左輔洞明星君・北斗右弼隱元星君の輔弼二星がでくるのである。このような並べ方からすると、吉田文庫本『北

斗經』つまり兼俱の方は、北斗七星信仰中心の構成であることが、よく理解できると思われる。これでもわかるように、

北斗九星信仰の方は、北斗七星に輔弼二星が加わって九星となっている。かくてこのような傾向は、また玄靈符において

もみられるのである。

次に、玄靈符についてみてみたい。道藏本『北斗眞經註』の徐註の卷五にみえる玄靈符と、吉田文庫本『神祇道靈符

印』と比較してみると、次のようになる。

天尊護護天尊  
太玄太妙聖德玄明斗中天罡  
仁化帝尊天道星君

20	安寧宅舍章	20	安寧宅舍章
21	保父母長生章	21	保父母長生章
22	化厭爲塵章	22	化厭爲塵章
23	萬邪歸正章	23	萬邪歸正章

(全體で五十七符あるが、以下は順序・内容とも同じなので省略した)

四

( 6 )

〔圖1〕

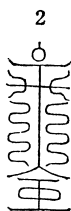
太上玄靈北斗本命延生  
真經註卷之五

玄靈符法

發爐符



復爐符



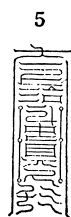
北極尊星寶章



北極帝星寶章



貪狼星君寶章



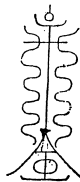
E

神祇道靈符印

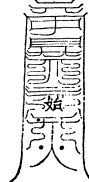
發爐



覆爐



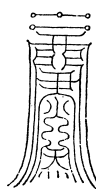
尊帝二星寶章



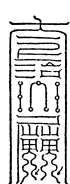
尊帝同于前



上台眞君靈章



巨門星君寶章



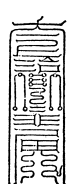
F

祿存星君寶章



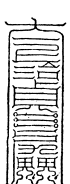
G

文曲星君寶章



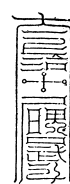
H

廉貞星君寶章



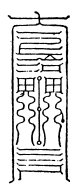
I

武曲星君寶章



J

破軍星君寶章



K

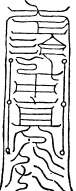
中台眞君靈章



下台眞君靈章

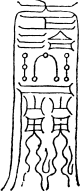


貪狼星君靈章



E'

巨門星君靈章



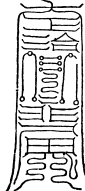
F'

祿存星君靈章

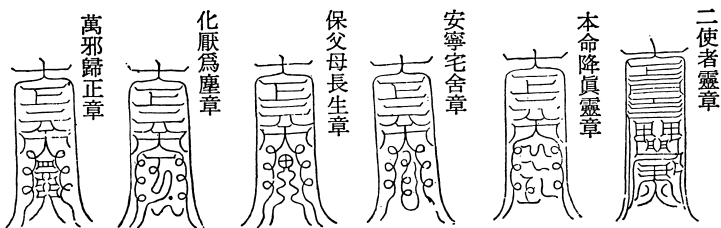
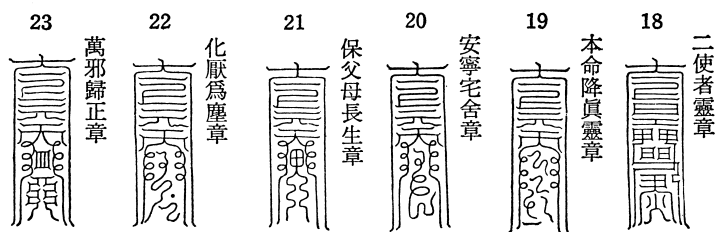
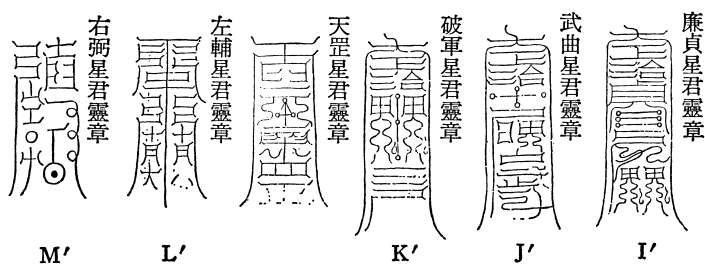
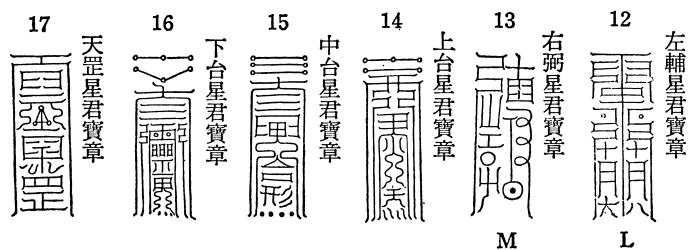


G'

文曲星君靈章



H'





田文庫本『北斗經』とを比較して、兩者に著しい異同があることから、吉田文庫本は道藏本とも異なつた傳本ではないかと、の疑問を呈した。

吉田文庫本『北斗經』の底本となつた道藏本は、上述のようにに徐註本『北斗眞經註』であつて、兩書を仔細に検討してみると、明らかに吉田文庫本の方は、誰かの手が加わっていることがわかる。その誰かは、どうしても兼俱以外には考えられないのである。このことについては、詳細な考證が必要であることは論を俟たないところであつて、これについての拙稿を既に發表した。<sup>(8)</sup> 詳しい論考は、その小論に譲ることとするが、主な論點を示しておくと、(1)吉田文庫本『北斗經』には、道藏本にはない佛典の引用があること、(2)『九天應元雷聲普化天尊玉樞寶經』つまり『玉樞經』の引用の仕方において、吉田文庫本は「普化天尊言」と言い換えたり、またこれと同じ文言を加えたりしていること、(3)吉田文庫本は、道藏本の文を何箇所か加筆・改變していること、(4)特に吉田文庫本には、道藏本にはない偈や註を加えていること、(5)これはかなり決定的なことであるが、吉田文庫本は道藏本の卷三・四に相當する部分において、その原文の配列の仕方を變えていること、などである。以上の諸點からみて、吉田文庫

本『北斗經』は、元の『北斗眞經註』をかなりの部分にわたつて、改變していることが知られるのである。

また第三に、玄靈符のことについてであるが、この玄靈符は上述の『北斗眞經註』卷五にみえるものであるが、吉田文庫本『北斗經』にはこれが關けており、吉田文庫の『神祇道靈符印』はこの玄靈符と並べ方の順序に異同はあるが、靈符そのものは實は同じものである(圖1)。西田博士は、吉田文庫本『北斗經』に玄靈符が關けていることについて、玄靈符を収める徐註の卷五を佚失した不完全本でもあろう、といっているが、しかし、これは江戸中期の臼井雅胤の『神祇破偽顯正問答』で、

ト部家ヨリ諸社ノ祠官等ニ相傳スル靈印ハ、本朝ノ文字ニ非ズ。道家ニ用ル符文字ニテ北斗延生經ニ、三台北斗ノ符、輔弼ノ符、大聖北斗七元星ノ符ナリ。神代ノ文字ニテ、兒屋根命ヨリ、傳來ノ由ヲ申シ上ヲ翳メ偽リ、後奈良院ノ御宇天文二年ニ、綸旨ヲ掠メ拜領ス。此時ノ職事權左少辨惟房モ、ト部ト徒黨ナルベシ。然レドモ神祇ノコトニ非ズ本朝ノ物ニ非ズ。異域ノコトニシテ、道家ノ物ナリ。北斗延生經ニ載テ明白也。依テト部家ヨリ、祠官等ニ相傳スル靈符ヲ延生經ヨリ寫シ出シテ、其一ツ二ツヲ後證ノ爲

ニ書キテ載之。

と指摘し、この文に續けて尊帝二星寶章、三台眞君靈章の符を擧げ、更に北斗七星の靈符を載せている。この指摘によると、吉田家が用いている靈符類は、徐註の卷五の玄靈符をそのまま踏襲しているものであることがわかる。かくして吉田文庫本『神祇道靈符印』は、徐註の卷五の玄靈符を元にはしているが、おそらく兼俱の獨自な見解によって、構成が變えられているものといえる。徐註本の玄靈符と吉田文庫本『神祇道靈符印』との關係は、このように捉えて間違いないであろう。

## 五

さて、ここで『北斗經』にみられる北斗九星信仰についてみたい。この北斗九星信仰は、一體いつ頃盛んになったか、ということであるが、それについての史料を示しておく。即ち、『雲笈七籤』卷二十四所收の『北斗九星職位總主』（道藏六八二）に、

黃老經曰、北斗第一天樞星、則陽明星之魂神也。

第二天旋星、則陰精星之魂神也。

第三天機星、則眞人星之魂精也。

第四天權星、則玄冥星之魂精也。  
第五玉衡星、則丹元星之魂靈也。  
第六闔陽星、則北極星之魂靈也。  
第七瑤光星、則天關星之魂大明也。  
第八洞明星、則輔星之魂精陽明也。  
第九隱元星、則弼星之魂明空靈也。

とあり、次に『河圖寶錄』の文を引いて、第一陽明星・第二陰精星・第三眞人星・第四玄冥星・第五丹元星・第六北極星・第七天關星・第八輔星・第九弼星を擧げている。即ち、『北斗九星職位總主』は、北斗七星に輔弼の二星を加えた北斗九星としてゐることである。この北斗九星の中で、北斗七星を天樞星・天璇星・天機星・天權星・玉衡星・闔陽星・瑤光星と稱呼しているのは、既に『春秋運斗樞』や『晉書』天文志にみえてゐる。<sup>(10)</sup>つまり北斗七星を天樞・璇・璣・權・玉衡・開陽・搖光と稱しており、また隋の蕭吉の『五行大義』卷五、論諸神章には、遁甲九神を擧げ、その九神が斗（北斗）にあつては、破軍星に三神、武曲星・廉貞星・文曲星・祿存星・巨門星・貪狼星に夫々一神が宿っていると述べ、北斗七星の星の名がみえ、いろいろな名稱が存していたことがわかる。また、『雲笈七籤』卷三十一に、『九眞帝君九陰混合

縦景萬化隱天訣』(六八四)があり、ここでは北斗九星の夫人について記している。また『北斗九星隱諱經』があり、これは上の『北斗九星職位總主』とその内容が全く同じである。更に、『太上玄靈斗姆大聖元君本命延生心經』(三四一)や、道藏輯要第八冊に『九星新經註解』があり、これも北斗九星を中心に構成され、説かれており、宋の金允中の『上清靈寶大法』(九七一)も北斗九星を並記して、北斗陽明貪狼星君・北斗陰精巨門星君・北斗真人祿存星君・北斗玄冥文曲星君・北斗丹元廉貞星君・北斗北極武曲星君・北斗天關破軍星君・北斗洞明左輔星君・北斗隱元右弼星君の北斗九星を擧げている。溯って、五代道教史上で不朽の業績といわれる杜光庭の『道門科範大全集』(九七六、九八三)には、「北斗九星の構成がみられ、更に同書卷五十八の「北斗延生懺燈儀」に、「北斗天英貪狼星君、天任巨門星君、天柱祿存星君、天心文曲星君、天禽廉貞星君、天輔武曲星君、天衝破軍星君、左輔右弼星君。」ともみえる。ここでも知られるように、北斗九星は北斗九皇ともいわれているのである。

このようにみると、原田正己博士がマレーの九皇信仰を調査し検討された論考の中で、中國の北斗九星信仰につい

吉田神道と北斗信仰(菅原)

ても述べられているが、そこで指摘しているように、九星信仰(九皇信仰)は唐末五代頃に起こって、宋代に盛んになったもののようである。<sup>(1)</sup>ここに掲げた史料などによっても、そのことは知られるのである。宋代のかかる時代を背景にして、『北斗經』も北斗九星信仰を基にして生まれたものであろう。<sup>(2)</sup>

## 六

北斗星が、司命の星であることは、今更いうまでもないことである。『太清境中精經』(一九)に、「北斗居中天、而旋迴四方、主一切人民生死禍福。」<sup>(3)</sup>といていたり、「一切萬物生死、皆屬北斗。」とあることで明らかである。北斗が人の生命を司る神であることをいっているのは、既に、『後漢書』趙壹傳にみられるのであり、そこには「收之於斗極、還之於司命。」とあって、これは北斗と司命とを結ぶ文であるといえる。北斗に人の命を支配するという司命の性格があることは、かなり古い時代からあった考えであることがこれで知られる。また『後漢書』李固傳に「今陛下之有尙書、猶天之有北斗也。斗爲天喉舌、尙書亦爲陛下喉舌。」斗斟酌元氣、運平四時。尙書出納王命、賦政四海。」とあつ

て、北斗は天地の元氣を酌みとつて、四季の運行を順調ならしめる役割を果していることを述べている。

『北斗七星護摩祕要儀軌』に「北斗七星者、……以司善惡、而分禍福。群星所朝宗、萬靈所俯仰。若有人能禮拜供養長壽福貴、不<sub>レ</sub>信敬者運命不<sub>レ</sub>久。」とあつて、北斗信仰によつて長壽福貴がえられることがいわれている。北斗が司命の星であることは、『太上三洞神呪』・『元始天尊說玄微妙經』・『太上飛行九神玉經』などでもいわれている。また『阿婆縛抄』・『覺禪鈔』にみえる密教の北斗法は、息災を目的としている。

ところで、吉田文庫本『北斗經』では、宋代に行われていた北斗九星信仰を受け入れず、あくまでも北斗七星を固持し續けてきていることである。<sup>(19)</sup>それは吉田文庫本『北斗經』は、兼俱の意向によつて構成しなおされているが、この經は北斗七星中心の構成になっていることで知られる。また更にこの經の誦經儀式としての開經偈にあたる發爐の呪文によつても知ることができる。まず、道藏本ではどうなっているかという、その「誦北斗經訣」に、

凡誦經、或朝禮、先凝<sub>レ</sub>神叩齒、端座調息。閉目靜思、泥丸宮中有<sub>二</sub>九宮<sub>一</sub>。九星各處<sub>二</sub>一宮<sub>一</sub>而坐。七人如<sub>二</sub>眞形之狀<sub>一</sub>、

二人輔<sub>二</sub>弼之<sub>一</sub>。

の如くに、九星が基本となった論旨になっている。なおまた、この訣文中には九星とか、合わせて九人の北斗九星を指し示す文が見られる。それに對して兼俱の『北斗經』の讀經前の發爐の呪に、

无上靈寶三清三境道德天主太上老君、昊天金闕至尊玉皇大帝、紫微天皇大帝、紫微北極大帝、三天扶教大法天師、斗母紫光元君、斗中尊帝星君、北斗七元星君、三台華蓋星君、斗中天罡星君、左輔右弼星君、敬楊陀羅二大使者、斗中眞宰一切聖衆、……

とあつて、兼俱は北斗七星中心の北斗信仰であつたことが知られるのである。

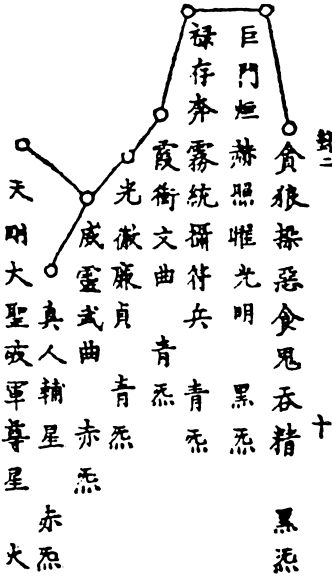
## 七

北斗九星は、どのように圖示されているか、というと、大凡の圖が北斗七星に輔星を加えた星座圖になっていることがわかる。このような北斗圖は、道藏では『太上助國救民總眞祕要』(九八六)(圖2)、『大洞玉經』(二八)、『太上洞眞經洞章符』(三七)、『太上祕法鎮宅靈符』(三七)、『黃帝太一八門入式訣』(三二三)、『上清靈寶大法』(九四五・九五七)などで

みられ、佛典類では、『佛説北斗七星延命經』（圖3）、『梵天  
火羅九曜』において描かれている。

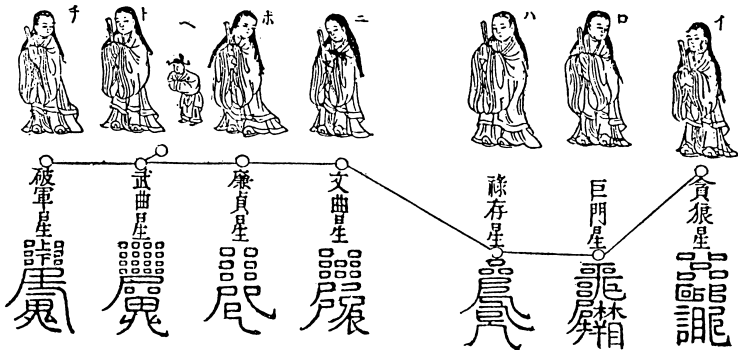
これらの北斗九星圖をみると、いわゆる柄杓の柄の端が第  
七星の破軍星で、その一つ手前が第六星の武曲星で、ここに  
輔星が付されている。つまり輔弼の二星の内の輔星が描かれ  
ているのが殆どである。確かに實際に武曲星（ミザール）の  
近くにアルコアという星があつて、この星は重星といわれて  
いるが、小さな星が輔星に相當するようである。また實際に

## 北斗星形



〔圖2〕『太上助國救民總真秘要』

吉田神道と北斗信仰（菅原）



〔圖3〕『佛説北斗七星延命經』



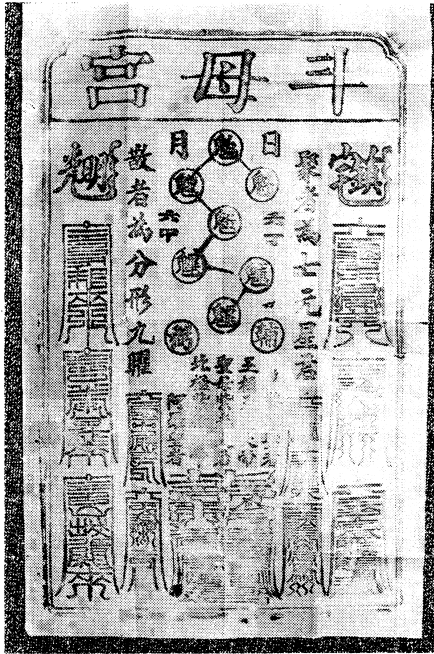
〔圖4〕 觀智院藏「星曼荼羅」  
〔寶雲〕十七冊所收

輔弼二星が描かれているものもあって、それは觀智院藏の「星曼荼羅」(明、隆慶三年銘)(圖4)<sup>15)</sup>やベナン九皇廟觀音亭斗母宮の符呪(圖5)<sup>16)</sup>などにみることができる。ところで輔弼二星の内、輔星のみが描かれているのは何故であるかという、第九番目の弼星は『北斗九星職位總主』によると、「第九弼星、太帝真人星。曰空隱一也。」<sup>17)</sup>といっており、また『太上飛行九神玉經』に「弼星曰空、輔星曰常。常者常陽、空者隱藏。」とあって、弼星は「空隱」といわれる、<sup>18)</sup>「隱藏」といわれたりして、星としての姿を現わさない星なのである。したがって、弼星は星として圖示されないのが常であるといえる。つまり、北斗九星が圖示される場合、輔星のみが記されていて、弼星が記されていないのは、かかる理由によるのではなからうか。

日本において、北斗七星・北斗九星の圖が描かれるのは、密教關係の史料に多いが、この場合輔星は描かれてはいるが、北斗九星としては考えず、北斗七星として論じている傾向が強

い。そのために、北斗九星信仰は、日本では育たなかったのではなからうか。兼俱の北斗七星信仰も、やはりそれと同じ傾向であったといえるようである。

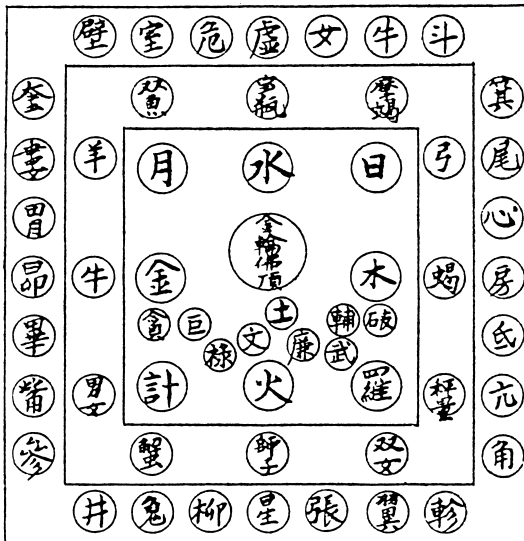
日本において北斗信仰を示す図形は、平安末頃、仁和寺成就院寛助僧正の曼荼羅圖（圖6）に北斗七星が描かれているものが、早いものであろう。それは北斗七星圖が主であつて、七星圖とは別にまた輔星を付した北斗七星圖もみること



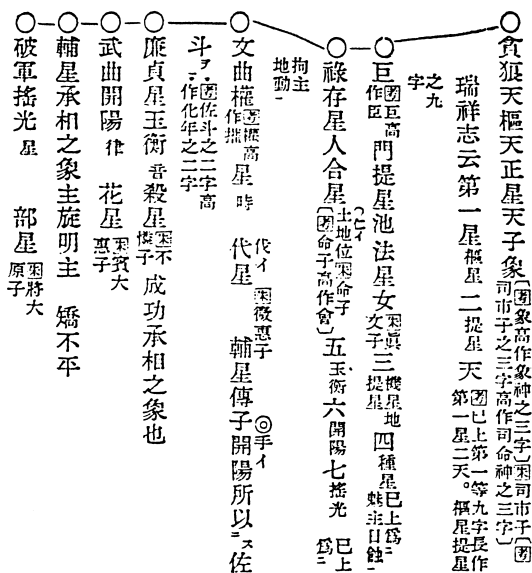
〔圖5〕 ペナン九皇廟觀音亭斗母宮符

吉田神道と北斗信仰（菅原）

ができる。それよりのちのやはり寛助の『別行』、『覺禪鈔』（圖7）、醍醐寺寛命の『諸尊要抄』、興然の『四卷』、心覺『別尊雜記』、賴瑜『薄草子口決』、亮尊『白寶口抄』などには、北斗七星圖の他に、北斗七星に輔星を加えた星形圖もみることができ。



〔圖6〕 寛助僧正曼荼羅圖（『寶雲』17冊所收）



## 結 び

ところで、北斗信仰は如何なる意味をもつものであるかという、それは北斗七星は司命の星であるからである。元旦の四方拜のときに天皇自身がその屬星である北斗七星を拜す

る儀式を行うのは、やはり北斗七星が司命の星である理由による。この北斗は、特に死の方を司る司命の星とされている。一方、生を司る星は南斗とされているのに對應している。そこで北斗信仰は經名に延生というとおり、本命星を尊崇して、延命を願うことにあったことはいうまでもない。そしてその他、經中に「家有「北斗經」といって、家に『北斗經』があると、家が安寧であつたり、父母が長生きであつたり、子孫が榮えたり、病が治つたり、財産が減ることがなかつたり、悪いことが起こらなくなつたりして、長く御利益を受けることができるという。これと似た効果は、北斗呪を唱えることによって齎らされ、やはり長生を得ることができるのである。また『太清境中精經』には、既に觸れたように、北斗が全ての生物の生死やその禍福を支配していることをいう。つまり『北斗眞經註』が、兼俱によつて尊重され、そして書寫されているのは、この『北斗經』が延命長壽のための經典であつたことに、一つの原因があつたとみて差し支えなからうと思う。

ただ、兼俱は、もとの『北斗經』の北斗九星信仰を取ることなく、從來の北斗七星信仰を守り徹したといえる。これは日本ではまだ北斗九星信仰が定著しておらず、まだ北斗



七星信仰が主流であったがためではなからうか。そして、このような受容の仕方は、兼俱の道教經典受容のあり方の基本的態度であったものと想われる。

# 註

- (1) 『中世神道論』（『日本古典文學大系』所收）二二三頁。
  - (2) 『五山文學全集』卷四、四三二頁。
  - (3) 『延喜式』（『新訂増補國史大系』所收）卷八、一七〇頁。
  - (4) 西田長男博士「吉田神道における道教的要素」（『日本神道史研究』五所收）及び出村勝明（龍日）氏「吉田神道の成立」（『神道史研究』二十一の五）、同「吉田神道の道教的要素について」（『神道史研究』三十七の四）などの諸研究がそれである。また出村氏には、平成元年六月の第三十五回神道史學會と同年九月の第四十八回日本宗教學會學術大會において、吉田神道の道教的要素に關する發表をされており、これは上記の同氏最近の論文にまとめられている。
- 更に、昭和六十三年十月、伊東市で開かれた日佛コロック東洋學第一部會で、坂出祥伸・増尾伸一郎兩氏の發表「中世神道と道教—吉田神道の傳書と『太上玄靈北斗本命延生眞經』—」も、やはり大いに關聯する。コロックのこの發表の對論者となった私は、吉田文庫本『北斗元靈經』は、底本の忠實な書寫本ではなく、恐らく兼俱の手が加えられ、然もそ
- 吉田神道と北斗信仰（菅原）

の構成までも變えられたものではなからうか、との意見を述べておいた。

- (5) 『平田篤胤全集』卷八、一九八頁。
- (6) 西田博士の前掲書、一七五—一七六頁。
- (7) なお、道藏本の徐註『太上玄靈北斗本命延生眞經註』卷五の玄靈符と、吉田文庫の『神祇道靈符印』の靈符は、出村氏の前掲論文「吉田神道の道教的要素について」に、總て對照して載せてあるので、小論では特に比較上、並べ方に差異のある部分についてのみを掲げておいた。
- (8) 拙稿「吉田兼俱と『北斗元靈經』」（『牧尾良海博士喜壽記念 儒佛道三教思想論攷』所收）を参照されたい。
- (9) 蓬左文庫本『神祇破偽顯正問答』を用いた。なお、白井雅胤とその著『神祇破偽顯正問答』については、前掲の出村氏論文「吉田神道の道教的要素について」に詳しく論じている。
- (10) 百納本『晉書』四九〇二頁。
- (11) 原田正己博士「マレーシアの九皇信仰」（『東方宗教』五十三號所收）一一頁。
- (12) シンガポールで刊行され、今も用いられている『北斗消災延壽妙經』（原田博士藏）も、やはり北斗九星信仰に立脚している。
- (13) 上掲の原田博士「マレーシアの九皇信仰」一八頁、參照。

- (14) 北斗信仰や星宿信仰などを含む道教の日本への傳來については、妻木直良氏「日本に於ける道教の研究（下）」（『龍谷學報』三〇八號所收）・吉岡義豊博士「妙見信仰と道教の眞武神―附天正寫本「靈符之秘傳」―」（『吉岡義豊著作集』第二卷所收）・那波利貞博士「道教の日本國への流傳に就きて（二）」（『東方宗教』四・五合併號所收）・窪德忠博士『庚申信仰の研究』・同「庚申信仰と北斗信仰」（『民族學研究』二十一卷三號所收）などの研究があるが、日本における北斗九星信仰について觸れている論文は、管見の及ぶところでは見當らない。

- (15) 吉祥眞雄氏「北斗曼荼羅に就いて」（『寶雲』十七冊所收）八一二頁。圖版参照。なお、吉祥氏論文所收の圖版を轉載することができたのは、東寺の御好意による。

- (16) 原田博士の前掲論文一四頁の寫眞版参照。なお、この寫眞は原田博士の御好意により掲載することができた。

- (17) 吉祥氏の前掲論文中の附圖第四圖である。

（本稿は、一九八九年度早稲田大學特定課題研究（共同）による研究成果の一部である。）